Y20a　国際極運動観測事業における機械式計算機の使用

馬場幸栄（国立科学博物館）

国立天文台の前身組織のひとつである緯度観測所（明治 32—昭和 63 年）では、膨大な量の観測データを処理するため、戦後になると FACOM426B などの電動式計算機が導入された。また、昭和 49 年以降は、TOSBAC-3400 モデル 51 や HITAC M-280D などの大型汎用計算機（メインフレーム）が導入されて、計算作業に活躍した。しかし、それ以前の緯度観測所では、計算用ツールの主力と言えば、機械式計算機だった。特に日本製の手廻し計算機であるタイガー計算器が多数設置され、緯度観測所での日々の計算作業に重宝されていたと言われている。しかし、そのタイガー計算器が緯度観測所において具体的にどのように使用されていたのかを示す文書や写真は、管見では、残念ながら見つかっていない。そこで、緯度観測所において国際極運動観測事業（International Polar Motion Service, IPMS）の計算係として勤務されていた元所員の方々にご協力いただき、同事業のためにどのようにタイガー計算器を使用していたのかについて、聴き取り調査を実施した。また、実際にタイガー計算器を使用して、当時の計算作業の様子も再現していただいた。